

「室町幕府の教訓その1 ～尊氏の優柔不断」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 鎌倉幕府滅亡までの道のり

我が国の歴史の中で一番分かりにくい時代といえば、皆さんはどの頃を思い浮かべるでしょうか。様々なご意見があるとは思いますが、私は室町時代が一番ではないか、と考えております。

室町時代と言え、幕府そのものは235年間続いたものの、前半の約50年は南北朝の動乱期であり、また後半の100年以上は、言わずと知れた戦国の世といった全く別の時代となってしまうことが、室町時代の分かりにくさに拍車をかけているようです。

これらの原因としてまず考えられるのは、室町幕府に今ひとつ存在感が見られないことではないかと思われ、そうなったのはやはり「大きな歴史の流れ」があり、また歴代の室町将軍が抱えていた様々な「問題」や「運命」といったものが、我が国のその後の歴史を決定づけたと言えるのではないのでしょうか。

我が国の歴史において室町幕府が残した「教訓」を見出すために、当講座では3回にわたって詳しく研究していくことにしました。今回は室町幕府の創設者である足利尊氏(あしかがたかうじ)の波乱に満ちた人生をたどりながら、彼の「優柔不断(ゆうじゅうふだん、ぐずぐずして物事の決断のにぶいこと)」が室町幕府を苦境に追い込んでしまった「歴史の裏事情」に光を当てていきたいと思っております。

さて、そもそも鎌倉時代においては、幕府と主従関係を結んでいた御家人が、自己の所領を幕府に保証してもらうという「御恩(ごおん)」に報いるかたちで、幕府からの要請があれば自費で様々な軍役(ぐんえき)に就(つ)くなどの「奉公」を行う、というシステムが定着していました。

軍役による御家人の負担は大きいものがありましたが、活躍次第では新たな所領を得られるため、御家人たちはそれこそ一所懸命に務めていたのですが、時が流れるにつれて、こうした「御恩」と「奉公」の関係は崩れていきました。

当時の武士の社会では、一族の子弟たちに所領を分け与えるという分割相続が一般的でしたが、これを何代も行っているうちに、所領が細分化して農業収入が減少するのに対して、幕府への奉公が変わらずに続いたため、必然的に困窮(こんきゅう)するようになってしまったのです。

やがて御家人の多くが、借上(かしあげ)や土倉(どそう)といった業者から借金をし始めましたが、借金を返済できなくなった御家人の中には、担保として自らの所領を奪われてしまう者も現われるよう

になりました。

これら御家人の困窮をよそに、幕府では執権を務めていた北条氏の嫡流(ちやくりゅう、正当な血筋を持つ家柄のこと)の当主である得宗(とくそう)の権限が強化されるという得宗専制政治が行われたことで、御家人の心が幕府から離れるとともに、不満が高まっていきました。

「御恩」と「奉公」のシステムが崩壊して鎌倉幕府の将来に暗雲が立ち込めた頃、朝廷においても皇位の継承に関する大きな問題が起きていました。

1246年、後嵯峨(ごさが)天皇が子の後深草(ごふかくさ)天皇に譲位されて院政を始められると、その後後深草天皇の弟である亀山(かめやま)天皇に譲位させ、さらに亀山天皇の子の世仁(よひと)親王を皇太子にされました。

その後、後嵯峨上皇(後に出家されて法皇とされました)が1272年に皇位の継承者を鎌倉幕府に一任される形で崩御(ほうぎょ)されると、幕府は世仁親王を後宇多(ごうだ)天皇として即位させる一方で、次の皇太子を後深草天皇の子である熙仁(ひろひと)親王に決めました。

要するに、幕府の調停によって、後深草天皇の血統である持明院統(じみょういんとう)と、亀山天皇の血統である大覚寺統(だいかくじとう)とが、まるでキャッチボールのように交代しながら皇位につかれることになったのです。いわゆる両統迭立(りょうとうてつりつ)が続いたことによって、両統は幕府に働きかけて自己の血統に有利な地位を得ようとするなど、やがてお互いに激しく争うようになりました。

両統迭立が続くなか、対立状態を解消するとともに、我が国は天皇が国家統治の大権を持つという自明のことを武士たちに示し、政治の実権を幕府から取り戻すことをかねてより念願とされていた、大覚寺統の後醍醐(ごたいご)天皇は、北畠親房(きたばたけちかふさ)などの優秀な人材を積極的に登用されました。

後醍醐天皇は討幕の計画を二度も進められましたがいずれも失敗され、幕府によって隠岐(おき)へと流されました。なお、1324年に起きた一回目の討幕は正中(しょうちゅう)の変と呼ばれ、二回目の1331年は元弘(げんこう)の変と呼ばれています。

後醍醐天皇が隠岐に流された後、鎌倉幕府は持明院統の光厳(こうごん)天皇を皇位にたてましたが、後醍醐天皇が退位を拒否されたため、お二人の天皇が並立されることになり、これが後の南北朝時代のきっかけとなったのです。

さて、後醍醐天皇が京都から追放されてしまわれたものの、子の護良(もりよし、または「もりなが」)親王が父の意志を継ぐべく諸国の兵を募って幕府に抵抗し続けたほか、幕府に対抗する武士団という意味の悪党(あくどう)の一人であった楠木正成(くすのきまさしげ)は、河内の赤坂城や千早城に立てこもって幕府の大軍と戦いました。

正成はわずかな兵で幕府軍に抵抗を続けましたが、その貢献度は絶大でした。なぜなら鎌倉幕府は

武家政権ですから、大軍で攻め込みながらわずかな兵の正成の軍勢に勝てないということは、それだけ幕府の威信に傷がつくからです。事実、正成がしぶとく戦っている間に、全国各地で討幕の軍勢が次第に集まってきました。

討幕の軍勢が自然と増加していった1333年、後醍醐天皇は隠岐を脱出され、伯耆(ほうき、現在の鳥取県西部)の名和長年(なわながとし)を頼って挙兵されました。

この事態を重く見た幕府は、北条氏と姻戚(いんせき)関係にあった有力御家人を現地へ派遣しましたが、実は、その御家人こそが足利高氏(あしかがたかうじ)でした。

足利高氏は清和源氏の一族であった源義家(みなもとのよしいえ)の子孫であり、北条氏の御家人の中でも名門の出身でしたが、鎌倉幕府の威信が地に墮(お)ちた現実を見極めた高氏は、幕府に背いて謀叛(むほん)を起こすことを決断しました。

高氏は他の反幕府勢力を率いて京都へ入り、1333年5月7日に六波羅探題(ろくはらたんたい)を滅ぼしました。同じ頃、高氏と同じ源義家の血を引く新田義貞(にしたよしさだ)も、上野(こうずけ、現在の群馬県)で討幕の兵を挙げて鎌倉へ向かいました。

義貞は鎌倉を脱出した高氏の子の千寿王(せんじゅおう、後の足利義詮=あしかがよしあきら)と合流して、一緒に鎌倉を攻めました。5月18日には北条氏最後の執権である第16代の北条守時(ほうじょうもりとき)を滅ぼし、22日には得宗の北条高時(ほうじょうたかとき)や内管領(うちかんれい)の長崎高資(ながさきたかすけ)らを自害に追い込んで、源頼朝以来約140年続いた鎌倉幕府はついに滅亡しました。

2. 「建武の新政」の理想と現実

鎌倉幕府が倒れた後、直ちに京都へ戻られた後醍醐天皇は、光厳天皇のご即位を否定されたほか、摂政や関白を置かれずに、天皇親政のもとですべての土地の所有権の確認に天皇の綸旨(りんじ、側近が出す天皇の命令書のこと)を必要とさせるなど、天皇に権限を集中させた新しい政治を始められました。

また軍事面では、天皇ご自身が軍隊をお持ちでなかったため、子の護良親王を征夷大將軍に任命されたほか、旧幕府の本拠地であった関東や東北には、それぞれ鎌倉將軍府や陸奥將軍府が置かれました。

後醍醐天皇によるこれらの新しい政治は、幕府滅亡の翌年(1334年)に改められた建武(けんむ)という年号から「建武の新政」と呼ばれています。

さて、主君に絶対の忠誠を誓うとともに徳のある者が天下を制するとした朱子学(しゅしがく)を熱心に学ばれていた後醍醐天皇にとって、両統迭立によって皇位の継承が不安定になることや、朝廷から政治の実権を「奪っていた」鎌倉幕府の存在は、絶対に許せないものでした。

ご自身が幕府を倒すために何度も討幕の兵を挙げられ、結果として建武の新政が実現できたことは、

後醍醐天皇にとっては当然のことであり、このままご自身による親政が永遠に続くとお考えでした。

しかし、後醍醐天皇に味方して幕府を倒すのに協力した武士たちは、勢力が衰えて政治を任せられなくなった幕府の代わりに、他の武士による新しい組織のもとで、これまでどおりの「武士による政治」を続けることを望んでいました。

それなのに、後醍醐天皇は皇族や公家のための政治のみを実行されるだけでなく、これまで守られてきた土地の所有権などの武士の権利がないがしろにされたことで、建武の新政に対する武士たちの不満が次第に高まっていきました。

かつての平家による政権が貴族化した際もそうであったように、いくら武力などで世の中を支配したところで、それが国民の理解を得られなければ、その支配は絶対に長続きできないのです。

今回の場合も、当時の国民の代表たる武士の期待に応えられなかった建武の新政には、やがてかげりが見え始め、そんな不穏(ふおん)な空気を察したかのように、後醍醐天皇から「最高の榮譽」を受けたはずの一人の武士が反旗をひるがえしたのです。

鎌倉幕府を裏切って京都の六波羅探題を滅ぼした足利高氏に対して、後醍醐天皇はその勲功を称えてご自身の諱(いみな、名前のこと。天皇のような身分の高い人は本名で呼ぶことを避ける習慣があったので、忌み名=いみな、という意味も込められていた)である尊治(たかはる)から一字をお与えになり、「尊氏」と名乗らせました。

このように、身分の上位の人間が下位の人間に対して自分の名前の一部を与えることを偏諱(へんき)といいます(なお、それまで名乗っていた高氏の「高」は、北条高時から同じように偏諱を受けていました)。天皇が身分の低い者、ましてや「ケガレた者」として虫けらのような存在であった武士に対して偏諱を受けさせるのは、空前絶後のことでした。

しかし、尊氏が本当に欲しかったのは征夷大將軍の地位であり、目指していたのは「武士のための政治」を自分が行うことでした。源義家の血を引く武家の名門の子孫である自分自身こそが、北条氏に代わって政治の実権を握るにふさわしいと考えていたのです。

そんな折、1335年に北条高時の子の北条時行(ほうじょうときゆき)が関東で中先代(なかせんたい)の乱を起こし、一時期は鎌倉を占領しました。尊氏は乱の鎮圧を口実に、後醍醐天皇の許可を得ないまま鎌倉へ向かって時行軍を追い出すことに成功すると、そのまま鎌倉に留まって独自に恩賞を与え始めるなど、後醍醐天皇から離反する姿勢を明らかにしました。

尊氏の謀反に激怒された後醍醐天皇は、新田義貞に尊氏の追討を命じられましたが、尊氏は義貞軍を打ち破ると、そのまま京都まで攻めのぼりました。しかし、奥州から北畠親房が入京すると朝廷軍は勢いを盛り返し、敗れた尊氏は九州へ落ちのびました。

都落ちした尊氏でしたが、九州で兵力をまとめると、持明院統の光厳上皇(こうごんじょうこう)から院宣(い

んぜん、上皇からの命令書のこと)を受け、自らの軍の正当性を確保したうえで、再び京都を目指して東上しました。

尊氏の動きに対して、後醍醐天皇は楠木正成に摂津の湊川(みなとがわ、現在の兵庫県神戸市湊川)で尊氏軍を迎え討つよう命じられましたが、正成は尊氏に敗れて自害しました。この戦いは湊川の戦いと呼ばれています。

尊氏が再び京都を制すると、後醍醐天皇は比叡山(ひえいざん)に逃れられ、光厳上皇の弟にあたる光明(こうみょう)天皇が新たに即位されたことで、再びお二人の天皇が同時にご在位されることになりました。

後醍醐天皇は京都に幽閉(ゆうへい、閉じ込めて外に出さないこと)された後、尊氏との和睦(わぼく)に応じて、天皇であることを証明する三種の神器を光明天皇に渡されましたが、その後に隙(すき)を見て京都を脱出され、奈良の吉野へ向かわれました。

吉野に到着された後醍醐天皇は、光明天皇に渡された三種の神器は偽物であると宣言されて、新たに朝廷を開かれた後、1339年に崩御されました。かくして、京都の朝廷(=持明院統)と吉野の朝廷(=大覚寺統)とが並立し、以後約60年にわたって争いを繰り返す「南北朝の動乱」が本格的に始まったのです。

3. 実は欠陥だらけだった「室町幕府」

さて、1336年に京都を支配した足利尊氏は、2年後の1338年には北朝の光明天皇から征夷大將軍に任命され、後に「室町幕府」と呼ばれる新しい幕府を京都で開きましたが、その前途には絶えず不安がつきまわっていました。

その理由として、まずは幕府を正当なものと認める後ろ盾となる朝廷が、二つに分裂していたことが挙げられます。北朝は本来の朝廷の都である京都におわしましたが、本物の三種の神器は南朝に存在するとされたこともあって、尊氏に従った新興勢力の武士の中には、北朝の正当性に疑問符をつける者もいました。

また、武士にとっての本拠地は鎌倉などの東国であるため、尊氏も本当であれば関東で幕府を開きたかったのですが、南朝がいつ北朝に取って代わろうとするか予断を許さない状態が続いたため、やむなく京都で幕府を開いたのです。このため、鎌倉には尊氏に代わる別の組織として鎌倉府が置かれたのですが、関東で鎌倉府に権力が集中したことによって、やがて幕府と対立するようになっていきました。

さらには尊氏自身の資質にも問題がありました。尊氏は根っからの武人であったため、実際の政治は尊氏の弟である足利直義(あしかがただよし)が代行していましたが、その一方で武将にしては珍しく「優しくて良い人」だった尊氏は、功績のあった武将に気前良く領地を与えていました。

しかし、領地が増えた武将がこの後に様々な権利を得ることによって守護大名と化したことによって、こちらも幕府のことを聞かなくなっていくのです。

加えて、南北朝の動乱が 50 年以上も続いてしまった大きな原因も、実は尊氏の「優しさ」にありました。尊氏は自身に偏諱を賜(たまわ)られた後醍醐天皇に対してどうしても非情になれず、隠岐などに追放して政治生命を断つことが出来なかったゆえに、天皇に吉野に逃げられて南朝を開かれてしまったからです。

尊氏の優しさは、悪くいえば「優柔不断」でもありました。当初は弟の直義と二人三脚で順調だった幕府政治も、やがて武断派の尊氏の執事(しつじ)の高師直(こうのもろなお)らの勢力と、文治派の直義らの勢力との間が不和となり、優柔不断な尊氏には、彼らをまとめることができませんでした。

そんな折、尊氏の実子でありながら父に嫌われ、直義の養子となっていた足利直冬(あしかがただふゆ)が尊氏派によって九州へ追われると、地元の勢力を味方につけて尊氏に反旗をひるがえしました。

九州の激変ぶりに驚いた尊氏が、1350 年に直冬を討伐すべく自らが遠征すると、その隙をついて直義が南朝に降伏しました。南朝はこの頃までに尊氏派の武将によって吉野を追われて賀名生(あのを、現在の奈良県五條市)まで後退していたのですが、直義の降伏で息を吹き返すことになりました。

直義は反尊氏派の勢力を引き連れて、尊氏の子の義詮(よしあきら)が守っていた京都へ攻め込み、敗れた義詮は尊氏を頼って備前(びぜん、現在の岡山県)へと落ち延びました。室町幕府が成立してから 10 年以上も経っていながら、天下は再び大きく乱れ始めたのです。なお、これ以降の幕府の内乱は観応(かんのう)の擾乱(じょうらん)と呼ばれています。

直義の謀反を義詮から聞いた尊氏は激怒しましたが、持ち前の優しさが仇となって、直義と正面切って対決することが出来ませんでした。そうしている間にも直義派は着々と勢力を固め、尊氏が覚悟を決めて直義と戦った際には、戦上手のはずだった尊氏が大敗北を喫してしまいました。

その後、一旦は和議が成立したものの、再び尊氏が直義を東西から挟み撃ちで倒そうとすると、尊氏の計略に気づいた直義は、京都を脱出して北陸伝いに鎌倉へ攻め込もうとしました。

武家政権発祥の地である鎌倉を奪われては尊氏の立場がありません。尊氏は直ちに直義軍を追撃しようとしたが、自分が遠征している間に直義派となった南朝に京都を制圧されて尊氏追討の綸旨(りんじ)を出されれば、自分が朝敵となって滅亡への道を進んでしまうのは火を見るより明らかでした。

進退窮(きわ)まった尊氏は、北朝から征夷大將軍に任じられているにもかかわらず、それまで敵対していた南朝と手を結んで、自分の味方につけるしか手段がありませんでした。

以前には後醍醐天皇、今回は直義といった、自分に敵対する勢力を政治的に抹殺することなく「生かして」しまったことで、尊氏は多くの血を流したうえにやっとの思いで構築した政治のシステム

を、自らの手で破壊せざるを得なかったのです。

自分が降伏することで北朝の天皇や皇太子が廃位される代わりに、これまでの幕府の既得権を南朝が追認するという条件で和睦した尊氏は、南朝から直義追討の綸旨を得て、ようやく遠征へと出かけましたが、これは南朝による罠(わな)でした。

南朝は尊氏が遠征した隙をついて、北畠親房の指揮によって京都へ攻め込み、幕府予備軍であった義詮の軍勢を敗走させると、勢いに乗った南朝は、北朝の三人の上皇と皇太子を、自分たちが追われていた賀名生へと移しました。

かくして後醍醐天皇が吉野朝廷を開いて以来、後醍醐天皇の子の後村上(ごむらかみ)天皇によって、16年ぶりに南朝が京都を支配するようになったのです。時に1352年閏(うるう)2月のことでした。

しかし、南朝の天下は長続きしませんでした。体勢を立て直した義詮が京都へ再び攻め込んだからです。南朝はしばらくの間は持ちこたえたものの、同年5月には追い落とされ、後村上天皇や親房は再び賀名生へと逃れていきました。

ちなみにこの後、南朝は一度も京都を回復しないまま、1392年に北朝との合一(ごういつ)を迎えることとなります。

なお、南朝と義詮とが争っている間に、尊氏と戦って敗れた直義が、同じ1352年2月に急死しました。尊氏による毒殺説もありますが、直義を討つために南朝と和睦するなど、幕府政治の根幹を揺るがした後となっては、すべてが手遅れでした。

さて、一時は南朝に京都を追われたものの回復に成功した義詮でしたが、ここで大きな問題が発生しました。尊氏の征夷大將軍を認める北朝の天皇になるべき直系の皇族が存在しないのです。

南朝の勢力が賀名生へ逃げ帰った後も、北朝の三人の上皇や皇太子は連れ去られたままであり、天皇であることを証明する三種の神器も南朝に奪われたままでした。

義詮は仕方なく、京都に残っておられた光厳上皇の第二皇子の弥仁(いやひと)親王を、神器も後見役となる上皇の存在もなしで無理やり後光厳(ごこうごん)天皇として即位させましたが、天皇の正当性としては、神器を所有する南朝に遠く及ばず、北朝の権威が著しく低下するという悪影響をもたらしてしまいました。

ちなみに、こうした北朝の権威の低下が、後の「ある足利將軍」の「大きな野望」へとつながっていくこととなります。

なお、尊氏は翌1353年によりやく京都へと戻りましたが、その後も直冬の攻撃を受けるなど混乱が続いた後、自分の代で平和を達成できぬまま、1358年に54歳で死去しました。

4. 尊氏の「負の遺産」がもたらした室町幕府の苦悩

戦後の一般的な歴史教育においては、室町幕府最初の将軍として一定の評価を受けている足利尊氏ですが、その内実は戦いの日々に明け暮れており、政治家としては明らかに物足りない印象しか受けませんが、その大きな理由は「尊氏の優柔不断」にありました。

「優しい人」「気前の良い人」といえば人間が本来持つべき性格であるとされ、私たち一般人の間では好かれる傾向にありますが、政治の世界においてはマイナスでしかありません。なぜなら、尊氏の「優しさ」は政敵を抹殺することをためらわすことで「優柔不断」となり、結果として幕府の将来に暗雲をもたらしてしまったからです。

尊氏が亡くなった 1358 年において、幕府の勢力が及んだ地域は鎌倉と京都が目立つのみであり、中国地方は足利直冬が、九州は後醍醐天皇の子である懐良親王(かねよしんのう、または「かねながしんのう」)が実質的な支配を固めていました。

しかも、三種の神器を所有している南朝こそが正当であるとみなされたことで、尊氏の征夷大將軍を保証する北朝の権威が低くなり、それと連動して足利将軍の地位も低く見られる傾向にありました。

さらには絶対的なカリスマ性を持っていた源頼朝と比較して、源氏の名門出身ではあったものの将軍として君臨するにはただでさえ器量不足だった尊氏が、他の勢力に「気前良く」領土を与えたことで、やがては守護大名が幕府のことを聞かなくなるという結果をもたらし、足利家そのものの地位をさらに低下させてしまいました。

こうした尊氏のいわゆる「負の遺産」をどう処理すればよいのかという大きな課題が、室町幕府代々の将軍を悩ませるとともに、我が国の歴史にも様々な影響を及ぼしていくのです。(続く)

主要参考文献：「逆説の日本史 7 中世王権編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379418>

YouTube 再生リスト「室町幕府の教訓その 1」
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML5ayrXdvf3PL5M7fDRzVZ7P>

黒田裕樹の歴史講座
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>